

『現代ドイツ語における文法性の 「意味」について』

鹿 兎 嶋 繁 雄

1. 学校文法における名詞の性に関する記述は、議論の余地の少ない自然性に関する記述が多い。それどころか、文法性を含むすべての性を自然性で分類し、それで記述が終わっている場合が多い。それによって、恰も性のすべてが説明可能であるかのような印象を学習者に与えてしまう。しかし、学習の進捗につれて、この記述の曖昧性が明瞭になり、逆に学習の障害となる場合もある。

幾つか、例を挙げよう¹⁾。

1. der Himmel (男性；以下 m. と略。「天」)——雨をふらせ五穀をみのらせる父だから男性。
2. die Erde (女性；以下 f. 「大地」)——実を結ばせる大地は被造物万有を養育する母だから女性。
3. der Wind (m. 「風」)——起き上がり、臥し、吠え叫び、窓をゆすぶる男性的なもの、という風に原始ゲルマン人は考えたのだろう。
4. die Sonne (f. 「太陽」) と der Mond (m. 「月」)——ギリシア・ローマ等暖かい南国では、太陽の光は強烈で日射病などを起こして恐ろしい。故に男性の威力を思わせ従って男性に考えられた。これに反し月光は和やかで女性の温和を思わせたから女性名詞になった。しかるに寒い北方のゲルマン・ドイツ人は太陽は温暖な光を与えて女性の温情を思わせ、反対に月光は日本の冬の夜におけ

1) 山田孝三郎『ドイツ語発達史』(東京, 1953) S. 168-170

る月のように物凄くて男性的厳烈の感じを連想させた。かくてこれが神話となり、ゲルマン人の宗教では月が男性，日が女性となった。……

5. **die Nacht** (f. 「夜」)——Edda 物語によれば，夜は巨人 **Nori** の娘であった。
6. **der Tag** (m. 「昼，一日」)——日は **die Nacht** の子で，しかも母なる **die Nacht** には似てもつかぬ鬼子 (?) だったから男性になった。
7. **der Donner** (m. 「雷」)——雷の男神を表す。
8. **die Hoelle** (f. 「地獄」)——下界の女神 **Hel** で，死者をその膝の中に隠す (**hehlen**) 者である。
9. **der Tod** (m. 「死」)——賊 (**der Rauber**) で，死者を縄で縛って生命の国から奪い去る者だと思われていた。……これら 5.—9. は皆ゲルマン民族最古の詩歌 **Edda** の中に描かれている所である。』

1.—4. の出典は示されていない。しかし，5.—9. における擬人化の過程を踏まえて，合理化した記述であるとはか思えない。月はギリシア語で，**mene** (f.) であるが，暦の月は **men** (m.) でゲルマン語は，後者を月の名称として受け入れた，と考えられる。中世では，m. と f. で揺れている，ところからも性決定の事情が窺えるのである。

人間基準から性を説明しよう，という試みは，今世紀初頭の，ドイツの師範学校の教科書にもみられるのである²⁾。

- 『1. a) **Vater** (m. 父), **Bruder** (m. 兄弟), **Knecht** (m. 召し使い),
Nachbar (m. 近所の人), **Hirsch** (m. 鹿); **Mutter** (f. 母),
Schwester (f. 姉妹), **Magd** (f. 女中), **Nachbarin** (f. 近所の女

2) Lippert, L.: Lehrbuch der Deutschen Sprache (Leipzig, 1914) S. 61

性), **Hindin** (f. 雌鹿); **Bild** (中性。以下 n. 「絵画」), **Wasser** (n. 水), **Tuch** (n. 布), **Blei** (n. 鉛)

∴

c) **Kind** (n. 子供), **Pferd** (n. 馬), **Rind** (n. 牛), **Huhn** (n. 鶏);
Volk (n. 民衆), **Heer** (n. 軍隊)——こら、そこで喧嘩するな!

∴

人と動物を表すすべての名称が男性か女性で、事物を表す名称がすべて中性ならば、ことばの世界と外界が一致するであろう。しかし事実はそのようではない。人と動物は事物として、逆に事物が男性あるいは女性として表現されている。……人を表すことばが事物として表現される理由として考えられるのは、1. それらにおいてははまだ性的特徴が表れていない場合：**Kind** (n. 子供), **Kalb** (n. 子牛), **Lamm** (n. 子羊)。2. 両性をまとめる場合：**Huhn** (n. 鶏), **Pferd** (n. 馬), **Rind** (n. 牛)。3. 事物の名称が語尾に付く場合：**Mädchen** (n. 女の子), **Böckchen** (n. 子山羊), **Männlein** (n. 小男), **Bäumlein** (n. 小木)。

多くの事物を言語化していく過程にはもっと深い原因がある。この課程は、言語の古い時期のものである。その当時はまだ若々しかった我々の祖先の想像力は、自然に魂を吹き込み、自然 (**Himmel** m. 空, **Sonne** f. 太陽, **Mond** m. 月, **Erde** f. 大地, **Berg** m. 山, **Strom** m. 川等) と自然現象 (**Blitz** m. 電光, **Donner** m. 雷鳴, **Sturm** m. 嵐, **Jahreszeiten** f. (複数) 季節) に人間としての性格を認め、その生命力の表れ方が、一方ではより男性的な性格、他方はより女性的な性格に一致するように思われた。**Hass** (m. 憎悪), **Neid** (m. 妬み), **Zorn** (m. 怒り), **Minne** (f. 中世騎士の女性に対する奉仕的恋愛), **Zucht** (f. 規律; 上品な振舞い), **Keuschheit** (f. 処女性) 等の抽象概念に関しても我々の先祖の若々しい想像力は人間としての性格を認めたのである。その事柄の表れ方が、男性的か、女性的か、という基準によって。**Mut** (m. 勇気) の単語族の

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

意味と性を比較すること。Hochmut (m. 高慢), Übermut (m. 有頂天), Unmut (m. 不機嫌); Sanftmut (f. 温和)——同じ基準で大きくて強い動物は男性 (Bär m. 熊, Wolf m. 狼, Adler m. 鷲, Storch m. コウノトリ, Hai m. 鯨), 小さくて、やさしい動物は女性 (Katze f. 猫, Maus f. ねずみ, Nachtigall f. ナイチンゲール, Amsel f. ツグミ, Forelle f. 鱒) ……』

外的世界をどのように言語の中で、組織化するか、という問題を考察する際に、人間の性を中心に置く試みが失敗に終わるのは、自然性と文法性を混同するところにあるのである。名詞の性は、生物的な分類ではなく、文法にとっては、言語上の分類の名称、つまり、種類に過ぎない。性 (Geschlecht) ということばの一般的な意味である性別に惑わされた解釈と言わざるをえない。例えば、番人 (Wache f.) とファッション=モデル (Modell n.) は、性が逆転しているが、自然性からは、何故男性の番人が女性名詞で、女性のモデルが中性なのかは、説明不可能である。

また、この解釈の前提となってる、古代の若々しい想像力、原始的な言語から、より文明的言語への発展という考え方は、今日では前面的に否定されている³⁾。

学校文法のこのような記述に根拠を与えている、歴史文法に目を向けると、同じ傾向が見られるのである。Lippert の教科書が出版された1914年から約100年前に浩瀚な『ドイツ文法』を著したヤーコブ・グリム (1785-1863) の「性」に対する考え方は、文法性よりも、自然性に傾いている⁴⁾。『文法とは、言葉の最も初期の段階において、すでに完了してしまった行為、あるいは全ての名詞に自然的なるものを適用したもの……自然的なるものが人間の言葉の空想においてすべての対象に拡張したもの……。中性

3) Pinker, S.: The Language Instinct 1994 (『言語を生み出す本能 (上)』(東京, 1995) P. 29-33)

4) Grimm, J.: Deutsche Grammatik 3, ((Hildesheim, 1989) S. 312-314; 356-357)

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

の本来の意味は、性の未発達を表しているのであって、性がないことを現わしているのではないように思える。動詞の不定詞から派生した中性名詞は、中性に特有の不定・一般化によって、人間が想像力をめぐらせて自然性を、膨大な中性名詞へと転用した、その想像力（類推）を窺うことができるのではないだろうか。……男性は、女性・中性と比べるとより時間的・時期的にはやく・大きく・頑強で・硬い・敏捷なもの；行為をする・動く・生み出すもの。女性は、時間・時期的に遅い・小さい・柔らかい・静止したもの；行為をうける・受動的なもの。中性は、生み出されたもの・作用を受けた・物質的な・集合的なもの；鈍い・無生物的なもの。』

グリムは、上記の基準に従って(1)知覚をもつもの、(2)抽象的なもの、について考察している⁵⁾。

- m. (1) **Molch** (有尾類), **Frosch** (蛙), **Weisel** (女王蜂), **Käfer** (甲虫), **Schmetterling** (蝶) ……
(2) **muspelheimr** (古アイスランド語；ムスベル Heim (火の巨人たちの世界。ドイツ語では中性)
- f. (1) **Schnecke** (蝸牛), **Blindschleiche** (脚なし蜥蜴), **Eidechse** (蜥蜴), **Made** (蛆) ……
(2) **Hölle** (地獄)
- n. (1) **Rohr** (葦), **Schilf** (葦), **Gras** (草), **Kraut** (本草), **Heimchen** (コオロギ) ……
(2) 古高ドイツ語：peh=Unterwelt (冥府)』

グリムの場合、膨大な例を挙げることに集中し、それらの例に統一的な性の振り分けの原理を示していない。そもそも名詞の性の分類に「意味」があるのか、という視点ではなく、所与ものとしていながら、混沌たるものとして、放置している状態である。

5) Grimm: *ibid.* S. 357–551

2. 文法において性とは何か

男・女・中性という性の三分は、サンスクリット語 (BC1000–AD 1000) 以来、古典ギリシア語 (BC5–4)、古典ラテン語を通じ、現代語まで印欧語における分類上の名称である。しかし、現代に至るまでに、俗ラテン語 (AD467以降) において、男性・中性の語尾が融合 (–us/–um: –u) した結果、現代ロマンス語において名詞に関しては男性と女性の二区分しか残らなかった。一方、ドイツ語と同じゲルマン語であっても、オランダ語のように男性・女性の区別がなく、共 (通) 性と中性の二種類になってしまったり、現代ロシア語のように三性が存在するが、その性は、語尾によって識別できる言葉も存在する。現代ドイツ語のように、性の区分の手掛かりを与えてくれない言葉は、その意味で特異な言葉である。

共時的には、これまでの例のような性の分類も可能性としては有り得るであろうが、通時的視点からは、これらの分類が、いかに脆弱な基礎の上に構築されたものであるかが、明らかになる。もっとも、かなり怪しいものなかにはあるが⁶⁾。

『サンスクリット語においては、有生 (男性・女性名詞) と無生 (中性名詞) を区別した。「水」の概念を示すのに有生 (男性・女性) の「水」と、無性 (中性) の「水」。女性形、複数 (apah) apas は、動くものとしての「水」を示し、さらに宗教的性格をもつ自然の力としての「水」の意味があった。これに対して、物質としての「水」は中性形の udakam で……物質的であり、宗教的ではない「水」の概念を表している。……ラテン語は有生 (女性) の「水」をもっている。aqua は、水の神聖な宗教的性格を示している。ゴート語 ahwa、古代高地ドイツ語 aha もまた、宗教的性格を示す「水」である。』

ここでも、擬人化⁷⁾ をあたかも名詞の実体であるかのような錯覚によっ

6) 堀井令以知『比較言語学を学ぶ人のために』(京都, 1997) P. 92–93

7) 辻直四郎『サンスクリット文法』(東京, 1979) P. 29『リグ・ヴェーダ賛歌』

て、事実を歪曲している。ゴート語 (AD 4 世紀；以下 got.) には確かに「水」を表す語は二つある。一つは、サンスクリット語の語幹 *ap-* から派生したと思われる *ahwa* (f.) と *udaka-* から派生した *wato* (n.) である。この二つの単語に宗教的性格は存在しない。

マタイによる福音書 (以下 Mat.)⁸⁾ 7.25 (8) *jah atidda dalath rign jah qemun ahwos* (οἱ ποταμοὶ 河) *jah waiwoun windos jah bistugqun bi thamma razna jainamma,*

雨が降り、洪水が打ち寄せ、風が吹いてその家に打ち付けても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

ルカによる福音書 (以下 L.) 7.44 *jah gawandjands sik du thizai qinon gath du Seimona: gasaihwis tho qinon? atgaggandin in gard theinana wato* (ὕδωρ 河) *mis ana fotuns meinams ni gajt;*

それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。

女性の *ahwa* は、動的な「水」—この場合はギリシア語の原文にあるように「川」で、中性の *wato* は静的な「水」である。しかし、この二つの単語の間にはたして「宗教的」相違が存在するのであろうか。むしろ、Mt. 7.25 の *rign* (雨) が男性ではなく中性であることの方に興味を湧く。それどころか太陽が got. では女性ではなく、中性であり、「北国云々」という説明はまったく根拠の無い解釈であることが明らかになる。

マルコによる福音書 (以下 Mc.) 13.24 *akei in jainans dagans afar tho*

(東京, 1994) P. 66-68

8) Streitberg, W.: Die gotische Bibel (Heidelberg 1971)

aglon jaina sauil riqizeith jah mena ni gibith liuhath sein.

それらの日には、このような苦難の後に、太陽は暗くなり、月は光を放たず、

jaina は jains の中性形。さらに時代が下った古高ドイツ語 (AD750–1050 ; 以下 ahd.) では男性であった⁹⁾。

ahd. Himmel und Hölle (天国と地獄) (12世紀の Vorauer 写本 ; Bamberg, München)

Diu himilisce gotes burg diu ne bedarf des sonnen noh des mânskîmen dâ ze liehtenne.

天国の神の砦は、明かりのために太陽も月も必要としない。

ahd. よりも時代が下がった中高ドイツ語 (1050–1350 ; 以下 mhd.) の期間に、Luft (f. 大気) は、女性と男性の間で揺れている。mhd. では、m. 「空気・大気」、f. 「風・外気」の二つの意味を持っていた。

Parival (以下 parz.) 748.28¹⁰⁾ geêrt sî luft unde tou daz hiute morgen ûf mich reis

大気と、今朝私に滴り落ちた朝露も称えられよ。

parz. 96.19 vil boume stuont in blute von dem suezen luft des meien.

五月のかぐわしい風を受けて木々が花をつけ……

parz. 75.27 man bant von im den adamas, niwan durch des windes luft,

彼はダイヤモンドの兜の紐を解いた。しかしこれは涼しい風を入れるためで……

この時代の luft の一般的イメージを伝えている Meinauer Naturlehre¹¹⁾ では次のように書かれている。

『Daz dritte element daz ist der luft. der besluzit in sich die ersten zwei;

9) Schauffler, Th.: Althochdeutsche Literatur (Leipzig 1908) S. 155

10) Wolfram von Eschenbach “Parzival” (Darmstadt 1981)

11) Wackernagel, W. (Stuttgart 1851): Mettke H.: Altdeutsche Texte (Leipzig 1970) S. 483

unde ist warm und fiuchte. 第三の要素は luft である。luft は前述の二つの要素（大地と水）を含んでいる，そして暖かく，湿っている。』

このような意味をもった luft は，parz. 748.28 では，全世界という意味を含み，その大きさと対比して微小な朝露を並列させたのではあるまいか。Meinauer Naturlehre¹²⁾ では，大地を核に，水，大気，火，人，水星，金星，太陽，火星，ジュピター，土星が同心円で取り巻いている。この世界図と，パルチヴァールと異母兄フェイフィースとの出会いのこの場面での台詞を対比させると，その意味が明瞭になるのである。748.19「力ある私の神ユピターは大いなる幸いの保証人だった。748.23 また遊星の光も称えられよ。」もし，luft がこのような世界観をもった作者の創作上のレトリックであるとするならば，先のフェイレフィースの台詞に対するパルチヴァールの台詞 949.3-5「あなたはお口がうまい。私もできれば喜んでもっと立派に申したいのだが，残念なことに，話はそれほどうまくないので……」が誉め言葉として理解できるのではあるまいか。

mhd. の luft は，現代語の Luft と比較して，「要素」あるいは「条件」をより多く含んでいるようである。Duden の Stilwörterbuch の Luft の項には，mhd. の luft の「意味」——「暖かく，湿った気体」——の場合は「暖かい」「湿った」という形容詞を必要とする。(warme Luft; die Luft ist feucht) また，現代語の Luft は，「動き」も含んでいない¹³⁾。同じく Duden では，es weht ein frisches Lüftchen. (涼しいそよ風が吹く)。parz. 75.27 の niwan durch windes luft「風の気によってだけ」という表現における luft の「暖かく，湿った」要素を wind (語源は wehend<wehen (ビュービューという)) という擬音に由来する動詞の現在分詞) という激しい空気の流れを表す言葉によって排除され，それによって「運動」の意味が加え

12) ibid. S. 485

13) Leisi, E.: Der Wortinhalt (Heidelberg, 1961) (鈴木孝夫『意味と構造』東京, 1971) P. 23

られるているのではあるまいか。luft (m.f.) の意味の変容が現代語の Luft (f.) への変化に関連しているのではあるまいか。

現代の共時的文法では、さすがに、名詞の性に関して神話的解釈をするものはないが、相変わらず文法性と自然性を混同した、恣意的な分類がまかり通っている¹⁴⁾。

『文法的性の体系において生物学的性が本質的役割を果たしている。生物学的性は意味的な車軸（中心）であり、文法的性の構造を組織化している。文法的性に分類されるグループは、生物学的に分類されるグループに比べて、極めて少数である。』『女性名詞が表す行為は、男性名詞の行為とは異なる。男性名詞では暴力行為（Schlag m. [殴打], Stich m. [刺す], Biß m. [噛み付き], Riß m. [裂く]）そして争い（Zank m. [口論], Zorn m. [怒り], Spott m. [嘲弄], Verdruß m. [不愉快な気分]）。女性名詞は——人間の行為を客観化する——においては、人間が他の人間とどのように付き合うかを表す語群と出会うのである。女性名詞は、「情報伝達」のための名詞である。Bitte f. (依頼), Frage f. (質問), Hilfe f. (援助), Pflege f. (介護), Lehre f. (教え), Sprache f. (ことば)』

これより更に極端な議論¹⁵⁾——原語彙素（Mädchen n. 【女の子】 Jungfrau f. 【乙女】 Ehefrau f. 【妻】 Fräulein n. 【お嬢さん】 Dame f. 【淑女】 という女性を表す上位概念としての Frau f. 【女性】）に男性名詞が多い——もあるが、いずれにせよ、現代文法にとって性は本質的な問題ではなく、問題として取り上げる場合は、造語論——基体と派生接尾辞・接頭辞の付いた複合語との関係であって、性そのものを問うことは、無意味である、という立場をとっているように思われる。例えば、名詞の性を失ってしまった英語を母語とする A. フォクス¹⁶⁾ は、現代言語学の立場からドイツ

14) Adomoni, W.: Der deutsche Sprache (München 1970) S. 96 Brinkmann, H.: Die deutsche Sprache (Duesseldorf 1962) S. 28

15) Pusch, L. F.: Das Deutsche als Männersprache (Frankfurt a. M. 1984) S. 35

16) Fox, A.: The structure of German (Oxford 1990) (『ドイツ語の構造』東京, 1993)

語を記述し、基体の性の意味については全面的に否定している。『ドイツ語の性は意味論的な観点からすれば、多分に恣意的である。性は原則として指示されたものの性別 (sex) を反映していない。だから、どうしてドイツ語の窓 (Fenster) が中性で、ドア (Tür) が女性で、庭 (Garten) が男性であるのかについて、納得できる意味論的理由はない。……形態論的に派生した語の場合には、性はふつう特定の接辞、あるいはその派生のプロセスによって決まる。……「転換」の場合にも、名詞の性は決まっている。

例えば、動詞の不定詞から形成されれば、中性名詞であるし (das Essen 【食事】 das Schreiben 【物を書くこと、書状】)、動詞語幹から形成されたものは男性名詞である (der Ruf 【叫び】 der Schlag 【殴打】)、つまり派生名詞に関しては、性はあらかじめ形態論の問題なのだ。派生語でない名詞については、そうした決定要因がない。そして性は大部分が恣意的である。……性の割り振りについて歴史的な理由を考察することも出来るだろうが、そうした思弁はたいがい無駄骨である。』

フォクスは、形態論、つまりは造語法で性の割り振りを簡単に結論付けているが、果たしてそれだけですべてを解決することが、可能であろうか。転換における語幹派生名詞が男性名詞である、というのは傾向であって、Spiel n. (ゲーム < spielen 【遊ぶ】) Teil n. (部分 < teilen 【分ける】) Suche f. (探索 < suchen 【捜す】) という重大な例外を無視しているように思える。また派生語ではない Fenster n. (窓) がなぜ中性なのか、という理由は立派に存在する。Fenster は、外来語 (俗ラテン語 fenestra f. イタリア語では, finistra f.) で、本来のゲルマン語の単語である got. augadauro n. (目+ドア; 英語 window < wind+eye 「風+目」) の性である中性を窓にあってたのであり、Loch n. (穴) と同じ理由—欠如詞¹⁷⁾—を表している。事実「窓」は本来柱の間に穿った「穴」だったのだから¹⁸⁾。

P. 160-161

17) Leisi: ibid. P. 5

しかし、ドイツにおいては、性の振り分けは、トランプの配られたカードと同じように偶然に支配されている、という前提のもと、性から意味を排除する、あるいはタブー視する傾向にある。意味と造語論を排除して、性の振り分けを考えるとという場合、残るものは音韻の分析である。しかし、その立場も、音韻あるいは音韻環境に「意味」を与える結果に終わっているように思われる。

ドイツ語を母語とする子供達が、どのような音を基準として、性の割り振りを習得しているか、という分析をした論文において、著者 Koepcke は、性を決定する要因について、接頭辞・接尾辞という限定された形態を除き、基体（ただし転換は含んでいる）のどのような音の組み合わせが意味をもつかについて次のように述べている¹⁹⁾。例えば、語頭の歯茎音と口蓋音の組み合わせ /dr/ /tr/ /sl/ /sr/ /st/ は圧倒的に（131語）男性であり、女性（12語）、中性（5語）は少数であった、と分析している。しかし、ある音韻、音韻環境が、名詞の性の振り分けの基準である、ということは、一つの可能性であって、それでは、なぜある音韻、音韻環境が基準となるか、という点は不問に伏している。この問いは、究極的には、ことばの音が、その音で名づけられた事物の性質を実体化し、ことば相互の関連が世界の諸現象相互の関連を明らかにする、というヘラクレイトス流の解釈に陥る危険性がある。現代言語学では、擬音語・擬態語を除き、音とことばの関連性は否定されている。音と性の振り分けとの関係は、何らかの「意味」を介さない限り、隔靴搔痒の謗りを免れ得ない。Koepcke も分析に「意味」を織り込んでいるが、それは従来の月並みな「意味」でしかない²⁰⁾

幾つか例を挙げよう。『時の単位、方向、降水（雨・雪・霰・雹）は男性。鉱物・岩石は男性。自然性に関わらない人・職業・地位は男性』など

18) オラウス・マグヌス『北方民族文化史下』（広島、1992）P. 32

19) Koepcke, K.M.: Untersuchungen zum Genusystem der deutschen Gegenwartssprache (Tübingen 1982) S. 302-21

20) Koepcke: ibid. S. 133 u. S. 70-80

15の「意味」を掲げているが、そのほとんどが男性で、女性は、唯一『奇数は女性』という意味を与えているにすぎない。

子供がドイツ語を習得する際に、音だけで性の振り分けを決めていると、考えるのは、非現実である。なぜならば、ことばを習得する際には、場面・文脈のなかで実際の事物と音は組み合わせられており、それをパズルのように—子供は生まれながら心的辞書をもっている²¹⁾—組み合わせているという説が有力である。つまり、『外界には、「実際のもの」、「ものの種類」、「動作」が存在し、人間の頭は、それらを見つけ出して単語というラベルを貼るようにできている。また、この世界の様態からいって、空間と時間の広がりをもと動作に切り分けるのは、物事を正しく予測するための、賢いやり方である。物質のかたまりをもとみなせば—つまり、部分の集合全体に一つの心的名称をつければ—それが一定の空間を占め続け、全体が一つの単位として移動するだろう、と予測できる。』

3. 生成文法が考えているように、人間共通の普遍言語が、人間には生まれながらに存在する、とするならば、個別言語の習得に際して、個別言語特有の個別ルールも存在してしかるべき、である。人間にとって普遍的な共通認識である、「もの」「ものの種類」「動作」をドイツ語ではどのように言語化しているのであろうか。そして、言語化の際に性は、どれほどの「意味」をもつものなのであろうか。

ドイツ語において性を持つ品詞は、名詞の他、人称代名詞（1・2人称は除く）・冠詞類・形容詞の四つである。これらは互いに形態がばらばらなのではなく、多少の誤差はあっても、それぞれの性において示差の特徴をもっている。それらが有機的に組み合わせられることによって、性の振り分けは、なかば自動的に決定されていくのではないか。

名詞だけを個別に取り上げて、その性の振り分けについて、その形態・

21) Pinker: *ibid.* P. 211–212

音・意味を分析しても、ドイツ語の場合は、例えば、ラテン語のように手掛かりを与えてくれるわけではない。現代ドイツ語（以下 nhd.）*Frucht* f.（果実）は、これ以上分割することは出来ない。しかし、lat. *fructus* m.（収益，利用，果実，利子，報酬）は²²⁾，*fru-*，*tu-*，*-s* と三つに分割することが出来る。これは印欧語の語幹 *bhrug-*（果実，楽しむ，使用する）で，*tu-* は名詞接尾辞，*-s* は単数・主格を表す。lat. の *frux* f. は、「実」，*fructus* m. 「木の実」，*frumentum* n. 「草の実（穀物）」の上位概念である。

ドイツ語の場合は、ラテン語のように語尾をてがかりにすることは出来ない。ドイツ語の場合は、拘束性 (*Kohärenz*) の問題として捕らえる必要があるのではないだろうか。この問題設定から性の振り分けの問題を考えているのが、ヘルマン・パウルである²³⁾。

ドイツ語の場合、3人称の代名詞は、英語と異なり、人・物という区別はない（もっとも、前置詞と融合する場合は除く）。ということは、ドイツ語では、外的世界を *er*，*sie*，*es* に三分割している、と言い換えることができる。そして、この性の違いが、文全体の意味を変える役割を果たしている²⁴⁾。

Schmidts Engagement für eine Annäherung ist zum Scheitern verurteilt, weil sie / es / er auf das Wohlwollen der Opposition angewiesen ist.

（シュミットの和解に向けての尽力は、はじめから失敗する運命にある。なぜなら和解／尽力／シュミットは反対派の好意だけが頼りなので。）

この代名詞は、それぞれ、次のような形態の代わりをしている。

sie – eine, die, diese…Annäherung（ある、その、この……和解）

22) Pokorny, J.: *Indogermanische Etymologisches Wörterbuch* (Tübingen 1991) S. 173

23) Paul, H.: *Prinzipien der Sprachgeschichte* (Tübingen 1995) S. 184

24) Eisenberg, P.: *Grundriß der deutschen Grammatik* (Stuttgart 1989) S. 175

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

er – ein, das, dieses, sein…Engagement (ある, この, 彼の……尽力)

es – ein, der, dieser…Mann (ある, その, この……男)

この三つの性の内, 男性と女性は, 人に関しては wer (誰) という疑問詞で, 中性は, 事物については was (何) という疑問詞で一つの概念としてまとめることが出来るのではあるまいか。しかし, 男性は人, 中性は事物を表す疑問詞と一対一の関係であらわすことができるが, 事物を表す女性の場合は, 対応する疑問詞が存在しないのであろうか。パウルは²⁵⁾『中性が, 事物を表す名詞として使われる兆しはあった。その兆しに対応するのが, 女性を含めた男性が人間を表すのに用いられることに見られる。このことは wer と was の違いである。この違いは, 印欧祖語にもすでに存在するが, 女性にはこれに対応するものは, 本来作られなかったのであろう。』と述べている。この女性に対応する疑問詞の問題は, 名詞・代名詞という文法上の品詞分類によって, 女性に対応する疑問詞 wie (いかに) を, 副詞に分類してしまったことによる自縄自縛に陥っているように思われるのである。品詞に拘らずに, wie が女性名詞とどのような関係にあるのかを, 見ていこう。

従来, 「意味」を基準とした分類ではなく, 語尾によって多数の抽象名詞が女性に分類されている²⁶⁾。

1. –ung (i) 行為・活動を表す –ung; die Befreiung (解放) Erziehung (教育) Reibung (摩擦) (ii) 状態を表す: Aufregung (興奮) Verwirrung (混乱) Beklemmung ((胸苦しさ) (iii) 動作の手段・方法・結果を表し, 具体的な意味を持つ: Kleidung (衣服) Wohnung (住居) Erfrischung (清涼剤)
2. –heit, –keit (i) 主として形容詞 (および分詞) と結合して, 性質・状態を示す抽象名詞をつくる: Freiheit (自由) Krankheit (病気)

25) Paul: *ibid.* S. 269

26) 塩谷饒『単語の知識』(東京, 1962) S. 40–41

Schönheit (美) Wahrheit (真実) 過去分詞より Gelegenheit (機会)
Trunkenheit (酔い) 名詞に直接付いた場合: Kindheit (子供らし
さ, 幼年時代) Gottheit (神性) 集合名詞: Christheit (キリスト教
徒一総数) Menschheit (人種)

3. Ablaut による変換: (i) 本来の運動・行為・活動を表す: Fahrt
(走行) Ankunft (到着) Kunst (芸)
- (ii) (i) の意味から具体的な場所: Furt (浅瀬) Gruft (墓地) Graft
(市中の運河) Bucht (湾)
- (iii) (i) の意味から具体的なもの: Huelle (覆い) Huelse ((鞘)
(Milbe (ダニ < mahlen) Muehle (製粉機)

これら女性名詞は、動名詞・「形容詞の名詞化」・音の変換による品詞の
転換であるが、ほぼ、疑問詞の wie (いかに) に対応している、と思われ
る。

品詞の分類とは²⁷⁾ 『意味の一種ではない。チェスの駒やポーカーのチッ
プと同様に、一定の形式のルールに則って機能するトークンの一種であ
る。』ある事態を表すには、品詞にとらわれずに表現することが可能で
ある。「ある事に興味がある」ということを表現する場合:

【名詞】 Hat sie Interesse fuer Pilze? (彼女は菌類に興味があるか)

【動詞】 Es hat damit angefangen, dass sie sich fuer Pilze interessiert. (菌
類が彼女を面白がらせる)

【形容詞】 Pilze sind fuer sie interessant. (彼女は菌類が面白いと思っ
ているようだ。)

【副詞】 Interessanterweise wuchs der Pilz einen Inch pro Stunde. (面白
いことに、その菌類は一時間に一インチずつ伸びる。)

wie が何故、疑問副詞と接続詞とに分類されているか、ということは統
語の意味からすれば当然である。つまり auf welche Weise (どのような

27) Pinker: *ibid.* P. 144

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

方法で), auf gleiche Weise (同じように) という意味であるから文全体の意味を理解する際には, それぞれ副詞・接続詞と理解するほうが合理的判断を導き易いからである。しかし, 代名詞から疑問詞 wie を排除したことによって, wer, was が er, es に対してもっているような関係があやふやになり, 女性名詞の性の振り分けに際しても, 取り上げられたことがないのである。

しかし, 形態的にも, 女性と疑問詞 wie の関係は明らかである。

	疑 問 詞			人称代名詞			定 冠 詞		
	nhd.	mhd.	ahd.	nhd.	mhd.	ahd.	nhd.	mhd.	ahd.
m.	wer	wër	hwër	er	ër(hê hër)	ër, ir	der	dër	dër
f.	wie	wie	wi(o)	sie	si, siu	siu, si	die	diu	diu
n.	was	waz	hwaz	es	ëz, it	iç, it	das	daç	daç

この三者の現代語との比較で, 目を引くのは, 女性語尾の -o, -iu である。この音韻は, 現代語の -au, -eu, -uh という女性をつくる音韻に変化した。

mhd. riu (riuhe, ruhe) f. ざらざらした皮 (nhd. rauh (荒い)) mhd. briu f. 女主人 mhd. spriu n. 複数形の類推から f. もみがら (nhd. Spreu) mhd. triu f. 誠, 約束 (nhd. Treu) mhd. vluo f. 険しい岩壁 (nhd. Fluh) mhd. kuo f. 雌牛 (nhd. Kuh)

nhd. -e は, 女性を作る働きがあるように思える場合がある (Kalb n. 子牛——Kalbe 雌の子牛; Drohn m. 雄のミツバチ——Drohne f. 雌のミツバチ)。この -e は, ahd. から mhd. に以降するさいに起こった変化である。この変化には, 二つつまり量的弱化和質的弱化がある。量的弱化とは, 音の弱化で, アクセントのない音節の母音が弱音の e に変化した現象 (ahd. waha : mhd. wache 夜番) である。この量的弱化が, 質的弱化, つまり意味的な変化を伴う場合がある²⁸⁾。

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

ahd.		mhd.	
強 変 化	強 変 化	強 変 化	弱 変 化
êra (名誉, 名声)	zunga (舌)	êre (騎士の地位)	zunge (舌)
単数主格 êra	zunga	êre	zunge
属格 êra	zungûn	êre	zungen
与格 êru	zungûn	êre	zungen
対格 êra	zungûn	êre	zungen
複数主格 êrâ	zungûn	êre	zungen
属格 êrôno	zungôno	êren	zungen
与格 êrôm(-ôn)	zungôm(-ôn)	êren	zungen
対格 êrâ	zungûn	êre	zungen

この表から分かることは、ahd. から mhd. においてすべての語末音が弱変化し、強変化の語尾が mhd. では複数・属／与格だけ語尾が付く。強変化から弱変化への移行、あるいは揺らいでいる女性名詞は、『状態を表す単語は、目に見える対象を表す単語に比べると、より本来の強変化語尾を保っている』。このことは、女性名詞の性を考える際の一つの判断基準になりうる。現代語においても基礎語 *Macht* f. 力ー複数 *Mächte* (強変化) に対して、複合語 *Ohnmacht* (気絶) *Vollmacht* (委任状) の複数はそれぞれ弱変化 (*Ohnmachten, Vollmachten*) となる。この原因は、女性名詞の本来の「意味」は様態、つまり「いかに」に対応するからではないだろうか。おもに、形容詞を女性名詞に転換させる *-heit, -keit*, 動詞を転換させる *-ung, -t*, 名詞・動詞・形容詞から女性名詞をつくる *-lei* などの接尾辞の意味の核には「様態」があるように思える。

(例) *Freund* m. 友人, 味方 *-freundlich* adj. *Freund* であること *-Freundlichkeit* f. 親切, 好意 *fahren* (乗り物で) 行く *-Fahrt* f. 走行, *führen* 導く *-Führung* 指導, *Fabellei* f. 作り話 (<*Fabel* f. 寓話), *Krabbelei*

f. がさがさ動き回ること (<krabbeln 這い回る) Nererlei f. 新しいもの (<nerer より新しい) この -lei²⁹⁾ という接尾辞は lat, lex f. 方式, 規定, 法律から由来している。

形容詞から名詞へ転換するには, もう一つ形容詞の名詞化がある。ここでは, 「赤」を意味する二つの名詞 das Rot n. と die Röte f. の違いを見ていこう。辞書では³⁰⁾ 次のように記述している。

Rot n. 赤い色 Röte f. 植物からとれた赤い染料に由来。赤であること。赤くなること。

Rot : ein kräftiges, leuchtendes, dunkles Rot (けばけばしい, 明るい, 暗い赤) die Ampel zeigt Rot (信号は赤だ) sich in Rot kleiden (赤い服を着る)

Roete; die Röte des Abendhimmels (夕空の赤さ) eine sanfte Röte (ein rötlicher Schimmer) färbte den Himmel (淡い赤みが (赤みがかった薄光) 空を染めた) die Röte seiner Wacken wirkte krankhaft (頬の赤みで彼は病的な印象を与えた)

この例から推測できることは, 中性は「赤」という時間の経過によって変化しない色, つまり対象としての色という外的世界を言語的に分節しているのに対して, 女性の「赤」は, 時の経過によって変化する, つまり, 中性と比較すると, 一時的な変化の過程・状態にある色を表している。そして, この中性と女性の「意味」の相違は, それぞれに対応する疑問詞とも関係するように思われる。

das Rot : Was für eine Farbe ist das? それはどんな色ですか。Das ist das Rot ihrer Lippen. 彼女の唇の赤。

die Röte : Wie war die Farbe ihres Gesichtes? 彼女の顔はどんな色でした。Ihr Gesicht war vor Scham von einer glühenden Röte

29) Kluge, F.: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache (Berlin 1975)

30) Duden: Das grosse Wörterbuch der deutschen Sprache (Mannheim 1980)

『現代ドイツ語における文法性の「意味」について』

übergossen. 恥ずかしさで彼女の顔は金時の火事見舞いのようだった。

この wie (様態) と was (事物) という外的世界の言語内での分節の基準は, Dornseiff³¹⁾ の辞典の大項目にも当てはまりそうである。

wie : Lage f. (位置) Form f. (形態) Größe f. (大きさ) Zahl f. (数)
 Beziehung f. (関係) Sichtbarkeit f. (可視物) Temperatur f. (温度)
 Ortsveränderung f. (場所の移動) Sinnesempfindungen f. (感覚)
 Charaktereigenschaften f. (性格特徴) Zeit f. (時間) Farbe f. (色彩)

was : Tier n. (動物) Wesen n. (存在) Geschehnis n. (出来事) Licht n. (光)
 Wollen und Handeln (意志・行為) Zeichen n. (合図)
 Schrifttum n. (著作) Geräte n. (器具) Recht n. (法) Übersinnliche n. (超感覚的な事物) Denken n. (思考)

この大項目の比較から, 相違を考えると, 具体的事物・対象・可算詞は, 中性に集中し, 女性の場合は, 形態, 大きさ, 色彩, 数のように具体的な対象にもなりうる抽象的な概念として, 漠然とした不定数・不特定の事柄として分節している様子が読み取れるのである。これを具体例で見ると, (動物の群れ)

f.	n.
eine Kette Hühner 鶏の群れ	Gespann (車を引く) 一組の役畜, 2 ~ 3頭
Herde (獣・家畜の) 群れ	Gesperr (キジの) 母子
Meute (猟犬の) 群れ	Geheck (水鳥の) 一かえりのひな, (きつね・狼)
Rotte (狼・イノシシなどの) 群れ	一腹の子

31) Dornseiff, F.: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen (Berlin 1970)

【現代ドイツ語における文法性の「意味」について】

小項目の語群にあてはまりそうな語群がある³²⁾。

女性名詞の場合の群れは、一時的であり、不定数で、ある漠然とした塊として事態を表現しているのに対して、中性は、定常的な数、常態としてある程度数の特定が可能であるような群れを表現しているように思われる。

このような女性名詞の「意味」は、接続詞 wie を用いた副文を、女性名詞で言い換えることが可能である、という事からも窺うことが出来る³³⁾。

Er zeigte mir die Lösung des Problems. = Er zeigte mir, wie ich das Problem lösen soll. 彼は私に、問題の解決法を教えてくれた。

Er wird sich bei seiner Schlaueit schon durchhelfen. = Er wird, schlau, wie er ist, sich schon durchhelfen. 彼はあの通り狡猾だから確かに困難を切り抜けるだろう。

32) Dornseiff: *ibid.* S. 176

33) Duden: *Stilwörterbuch* (Mannheim 1970)